



ND BULLETIN

Vol. 204

issue

August 2020

[卒業生・在学生対談]

「挑戦する」ための 一歩を踏み出す勇気

本学のリベラル・アーツ教育が育む、社会を生き抜く力

新聞社 部長×学生広報スタッフ「SPARKLE」



[学長メッセージ]

あなたは、孤独ではありません。



入学感謝の集い

特集 「卒論 -Sotsuron-」

卒業生の活躍

file.04

「挑戦する」ための一歩を踏み出す勇気

本学のリベラル・アーツ教育が育む、自分の進むべき道を見出していくための考え方、社会を生き抜く力を教えていただきました。

勇気を持って一歩を踏み出し、大学で挑戦したことは？

宮下 私が学んでいる社会福祉士課程には、学生ボランティアグループ「ひょうたんの会」があります。その会に参加して、西日本豪雨災害の復興ボランティアに挑戦しました。初めてのことでの緊張でしたが、災害に遭われた苦しみを知ると同時に、人と人とのつながりの大切さを学びました。

木村 私は、2019年ドイツで開催された模擬国連の世界大会に参加したり韓国で

の国際会議に出席したりしたほか、体育祭では実行委員長を務めました。挑戦をためらう前に、「まず一つ、挑戦してみよう」をモットーに大学生活に励んでいます。

山本 私は2年次に履修した「ジェンダー論」の授業で、岡山県警の犯罪被害者支援室の方から性犯罪などの話を聞いたことがきっかけで、犯罪被害者支援大学生ボランティア連絡会「あした彩（いろ）」の存在を知りました。そこに所属を決めたことが、私の挑戦への一歩です。

瀬尾 みなさん、いろいろなことに挑戦

されていますね。私は新聞社に入る前の3・4年生の時にNHK岡山放送局で契約アナウンサーを経験しました。新聞記者の仕事に興味を持ったのも、それがきっかけです。当時の私は、自分の考えを言葉で表現することがとても苦手でした。苦手意識を克服して成長したいと思っていた時に見つけたのが、アナウンサーの仕事です。応募しても無理かなと思っていたところ、同級生が「やってみたら！」と背中を押してくれたんです。今思うと、その一言がなかったら応募していなかっただかもしませんね。



卒業生

1989年 家政学部(現 人間生活学部)
児童学科 卒業

瀬尾 由紀子 (せお ゆきこ)

山陽新聞社に入社。記者として、社会問題から政治・経済、地域話題まで、あらゆる分野を担当。現在は、NIB・NIE部長を務める。豪・ボンド大学大学院MBA



在学生

英語英文学科 3年

木村 晃子



在学生

現代社会学科 3年

山本 美有



在学生

人間生活学科 4年

宮下 彩

[新聞社での今の仕事] 長年培った記者のスキルと幅広い人脈、新聞社の豊富なデータを用いて、NIB(ビジネスに新聞を)、NIE(教育に新聞を)を推進。企業や学校のニーズを把握し、新聞を活用した研修や授業を企画・実施している。

3名は『学生広報スタッフSPARKLE(スパークル)』のメンバー。大学ホームページのブログや学報記事の制作、イベント企画の協力を担当している。「挑戦」をテーマに、卒業生との座談会に初挑戦!

人の出会いやつながりが 進む道を照らし、歩む力になる

木村 瀬尾先輩のように、私も大学での出会いやつながりが自分の人生を色づけ、転機になっていると実感しています。模擬国連をはじめ、いろいろなことに挑戦する勇気が持てたのは、後押ししてくださる先生方との出会いがあったからです。

宮下 私も周りの人の力強い言葉が、自分にいい影響を与えていると感じます。大学での学びから、見えないところで困難を抱えている方が多くいらっしゃることを知り、今の社会構造を少しでも変える力添えがしたいと、社会福祉士の道に挑戦することを決めました。

山本 私も同じです。一つのきっかけから人とのつながりができ、自分の活動が成り立っていると感じます。インターンシップで岡山市内の公民館に行かせていただいた時に、職員の方々が「あした彩」の活動に関心を持ってくださるようになり、犯罪被害者に関する講座を主催させていただくことにつながりました。



自分の考えを真剣に話す学生たち

瀬尾 大学時代の経験や先生、友人の支えによって、進む道が照らしされることがあります。歩んでいく力にもなりますね。卒業して30年たった今でも大学での出会いが支えになっています。

木村 挑戦する機会がたくさん与えられていることに気づき、そこにいるからこそできることに挑戦していくことが大事だと思います。

山本 受け身の姿勢だった私が、今では、失敗して落ち込んだとしても、勇気を出せたことに自分で自分を褒めて



遠隔授業などの新しい取り組みが始まる中で、これからのコミュニケーションについて瀬尾さんに伺いました。「私がオーストラリアのボンド大学の大学院でMBAを取れたのは、オンライン講義があったからです。できないことにこだわらず、知らない自分や情報に出会える道を貪欲に進むことが必要だと思います」

いいと思えるまでに成長しました。

宮下 本学では、多面的に捉えることを授業で教えてくれます。視点を変えたら見えるものが違ってくることを学び、そこからどんどん挑戦すると、さらにたくさんのが見えてくる。今では発見することが楽しくて仕方ありません。

瀬尾 みなさんは、さまざまな情報を得て、自分のやりたいことを見つけ、一步を踏み出せていると感じます。自己を見つめ、自分がどういう位置にいるのかということをよく理解されていますね。

木村 その自己分析力を高めるために、私たちができることがありますか？

瀬尾 ぜひ、新聞を活用してもらいたいと思います。新聞を通して、社会の動きを知り、さまざまな人の生き方や考え方方に触れることができます。自分を客観的に見つめるきっかけにつながると思います。

どんな社会になんでも 成長し続けるために

宮下 どんな社会になんでも、成長を続けるために必要なことは何でしょうか？

瀬尾 「第2の選択肢(OPTION B)」の存在を自覚しておくことだと思います。「第1の選択肢(OPTION A)」がダメでも、すべてが終わるわけではありません。ぜひ、学生時代に他の選択肢を考える



書籍『OPTION B』を瀬尾さんに紹介していただきました。「この本には、最良の状態の『OPTION A』が失われた時に、『OPTION B』をいかにして見つけ、その後の人生の意義を見出していくかということが書かれています。予期せぬ出来事が次々と起こり、先が見えない今、人生を考える手助けとなる素晴らしい本です」

力を身につけてほしいと思います。「自分には知らないことがある」ということを知ることから始めてほしいですね。最後になりましたが、先行き不透明な今こそ知恵の出し所だと私は思っています。コロナ禍で準備を進めてきたイベントが中止になり、それで終わりと考えるのでなく「第2の選択肢(OPTION B)」を考えて工夫して取り組んでいくことが大切です。たまたま今の自分が、他の方法に気がついていないだけだと考え、そこで歩みを止めず、知恵を絞っていきましょう。

このように、学生一人ひとりの多様な可能性を発見しつつ、それを現実の社会の中で具体的な「生き方」に結び付けられるように支え続ける教育に、本学のリベラル・アーツ教育の特色があります。

学長メッセージ

あなたは、孤独ではありません。

ノートルダム清心女子大学 学長 原田豊己神父



2年前の岡山での経験に続き、今年も九州各地で水害の被害を受けています。さらには新型コロナウイルス感染症により社会生活が脅かされています。亡くなられた方、懸命に他者のために努力されている方、多くの苦しみある方々のために祈りを捧げます。

さて、大学は研究と教育という大きな使命を担っています。この使命を全うするために学びの場をどのような状況にあっても確保しなければなりません。現在の感染状況では、健康と安全を優先させるために学内への立ち入りを制限していますが、オンラインでの授業でも、本学の質の高い教育、一人ひとりを大切にする教育を維持しています。

しかしながら、本学は、単なる知識の獲得のみならず、そこに集うすべての者が互いに発する温かさを感じながら人格的に成長する教育を行ってきました。

そのために、オンラインでの授業を行いながらも、状況の変化に合わせて入構の緩和、通信機器等を用いて学生一人ひとりに寄り添うことなど最大限の努力をしています。あなたは、ひとりで孤独ではありません。先日行った「キャップとガウン授与」、「入学感謝の集い」も全員の参加はかないませんでしたが、意義深いものになりました。

この度の感染症により社会全体が委縮している中で、人間とは何者か、真に大切なものは、幸せとは、社会、国家、行動の制限と自由の意味、宗教、家族など人間存在にかかる問いを共に考えながら明日に向かってゆきたいと思います。

不安や困難を乗り越える導きを聖母マリア(Notre Dame)に祈ります。

新型コロナウイルス感染症に関する 本学の対応について

本学で行っている主な学修・学生支援は以下のとおりです。新たな情報や詳細については、大学ホームページ、および在学生の方へはNサポやmanaba folioで随時お知らせしています。

■学修・学生支援

- 各種奨学金の相談・受付
- パソコン環境を所持しない学生へのパソコン貸与
- 通信環境が不十分な学生への通信費補助
- コンビニエンスストアでのネットプリントサービスの利用

■キャリアサポート

- オンラインによる個人面談(Skype、Zoom等)
- 全体ガイダンス・セミナー等を動画にて配信
- メールによる求人情報の提供等

■教職支援

- オンラインによる教職個別面談を実施(Zoom等)
- 模擬試験や教員採用試験・求人の情報を提供
- 校種別の情報交換コミュニティを開設
- 学生閲覧室の書籍や資料の提供(郵送を含む)

■附属図書館

- 学内者限定で開館(予約制)
- 図書の郵送貸出
- 文献複写物の郵送
- 学生希望図書(リクエスト購入)の受付
- 電子ブックの学外利用
- データベース(論文検索、新聞記事検索など)の学外利用
- 動画(利用案内、ガイダンス)の作成

※図書の貸出・返却、文献複写物にかかる送料は、大学が負担しています。

■健康の相談

- 学務部保健センターでの対応(対面、電話、メール)(体調への不安、感染症への不安、受診について)
- 出席停止対応受付
- 学生相談員による学生相談(対面、電話)

3月

—
March

Event

2019年度卒業証書・学位記の授与

2020年3月13日(金)・14日(土)に、本学内にて2019年度卒業証書・学位記授与を行いました。新型コロナウィルスの感染が全国拡大している状況を受けて、卒業生および保護者の皆様の安全を最優先に考え、本学の伝統的な卒業関連行事である、ノートルダムデー(3月3日)、フッド授与式(3月9日)、卒業証書・学位記授与式(3月14日)を中止しました。

卒業証書・学位記の授与は2日間にわたり行われました。各学科に分かれ、そのなかでもさらにゼミ単位の少人数で集まりました。大学構内の滞在時間を最小に抑えたスケジュールの中ではありましたが、卒業生はアカデミック・ドレスを身に着け、担当ゼミの先生から一人ひとり証書を受け取り、お互い言葉をかわし、卒業を祝い、別れを惜しました。



4月

—
April

Event

新入生ガイダンスを実施

2020年4月1日(水)に入学ガイダンスを実施しました。感染症が拡大しているなか、密集しないよう席を離して座る、マスクを着用する、窓を開けて換気を良くするなど、複数の対策をとりながら、各学科に分かれ行われました。

ガイダンスでは当初の予定を変更し、履修に関することなど学生生活において必要な説明を行うこととしました。配布された資料を一つ一つ確認しながら、新入生たちは熱心に説明を受けました。このガイダンスは、4月7日まで実施しました。

また、4月9日から始まる予定だった授業は延期され、4月30日から遠隔授業を中心として開始されました。



6月

—

Event

4年生にキャップとガウンを授与

新型コロナウイルス感染症対策のため延期されていたキャップとガウンの授与を、6月20日(土)・27日(土)に行いました。5月16日(土)に予定していた式典に代わりキャップとガウンの配付にとどめ、大学からのメッセージをオンラインで配信しました。

キャップ・アンド・ガウン授与式は、4年生が学士候補生となったことを公に宣言し、これまでの3年間を振り返り、最高学年としての自覚と責任のもとに、卒業に向け新たな努力を誓う大切な意味を持つ本学の伝統行事です。

原田豊己学長から学生へのメッセージがオンラインで配信されました。——「学士候補生としての誇りをもって、学びを続けてください。宣誓の言葉にもあるように、学士候補生として認められることへの深い喜びとともに、ノートルダム清心女子大学の、理想と伝統を自ら体得し、母校をさらに栄えあるものたらしめることによって、この責任に応える覚悟をしましょう。英知を重んじ、善を尊び、真理を愛することによって、

今まで教え導いてくださった、多くの方々の、ご期待に添うように努力を続ける決意を新たにしましょう。」

学生たちの中には、数か月ぶりにキャンパスに足を踏み入れた人も多く、友人同士で笑顔を交わしていました。



職員から自分のサイズにあったガウンを受ける学生

7月

—

Event

入学感謝の集いを開催

本年度は文学部166名、人間生活学部242名、大学院生11名の計419名が入学しました。2020年7月11日(土)午前9時30分より、本学カリタスホールにて2020年度入学感謝の集いを開催しました。延期していた入学宣誓式、入学感謝ミサに代わる行事として実施し、新入生339名が集いました。感染症対策のため、学科・研究科ごとに3回にわけて行ったほか、席の間隔をあけるなどの対策に加え、出席は義務とはせず、会の中での聖歌、大学歌は歌わず音源を流す対策をとりました。

集いは聖歌を皆で聞いた後、学長原田豊己神父による祈り、聖書の朗読が続きました。

学長式辞では学長が「オンライン授業という新たな様式を受け入れながら、困難にあっても一人ひとりを大切にする人間理解、課題を克服する力を養う幅広い知識を身につけるように望んでいます。いずれこの状況が終息し、社会がその傷をいやそうとする時、そのための有為な一人として、皆さんの力が必ず求められます。その時のために、今は落ち着いて学修に臨まれることを学長としてせつに願っています。」とメッセージを贈りました。

そして、学生生活への決意を胸に、新入生は全員一斉に声を合わせ宣誓しました。



民俗調査のことなど

30余年を振り返って懐かしく思い出すのは、ゼミ生諸君との民俗調査です。着任時、学生に民俗調査を体験させるのは大学で民俗学を教える者の使命だ、と燃えていました。3年次夏休みの合宿調査はゼミのイニシエーションになりました。奥備後の吉備高原上のムラから南阿波の漁師町まで、県内外、いろいろな村落を訪ねましたが、どこでも年配の方々が好意的に話者となってください、学生諸君もこちらの意図を超えた調査をしてくれました。

ただ、これは2007年が最後でした。着任当時に比べ、夏休みが実質的に半分になってしまったことは大きな痛手でした。学生も私も忙しくなりすぎました。最後まで続けられなかつたことが心残りです。調査結果の一部しか活字にできなかったことも、申し訳ない思いでいます。

考えてみれば、調査でお世話になった方のなかには、いまの私とさして変わらない年齢の方々も少なからず

文学部教授 小嶋 博巳

おられました。そのうち私も話者になって、調査にやってきた学生さんに、大昔のなんちゃって教授会は最後はしゃんしゃんで締めていたとか、講義が終わると受講生が黒板に怒濤の如く殺到してチョークの文字を消してくれたとか、学生はみんなゴキブリシューズという上履きをはいていたとか、昔話を虚実取り混ぜ語ってみたいものだと思っています。



文学部現代社会学科教授。
学務部長、附属図書館長、
副学長を歴任。名誉教授。

充実した日々

非常勤講師を含めますと、30年以上の長きにわたり勤めさせていただきました。

常勤として初めて大人数のクラス授業をした20年前のことです。板書を始めると、後ろから「ザザザザ」と音が聞こえてきました。驚いて振り返ると、学生が一斉にノートに鉛筆を走らせていました。顔を上げて向ける視線は鋭く真剣な眼差しでした。その一言も聞き逃すまいとするような真摯な授業態度に、私は「自分の持てる力の全てを尽くして、彼女たちの学ぼうとする姿勢に応えなければならない」と強く思いました。

そして、授業終了時に板書を消そうとすると、慌てたように数人の学生が前に出てきて「私たちが消します」と静かに言いました。非常勤で勤めていたそれまでにも、学生たちの細やかな気遣いや優しさに接し、温かい気持ちになったり感動したりすることは多々ありました。この時改めて清心の素晴らしい教育の一端に触れた思いがしました。

人間生活学部教授 熊澤 住子

今振り返りますと、この30余年は、このような学生たちから、そして教職員の方々から私自身が多くのこと学び、貴重な体験をすることができた歳月であったとしみじみ思います。充実した日々を過ごすことができたことに心より感謝しますとともに、伝統あるノートルダム清心女子大学の今後益々のご発展をお祈り申し上げます。



人間生活学部児童学科
教授。学務部長補佐を
歴任。名誉教授。
長きにわたり、行事式典
の音楽指導にあたる。

卒論 —Sotsuron—

本学のカリキュラムの特徴に全学科の必修科目に「卒業論文」を課していることがあげられます。このため、学生は2・3年次の後期頃から各ゼミに所属し、教員の指導のもと1年から1年半かけて卒業研究を行い、卒業論文を書き上げます。学科によっては、絵画や被服などの作品制作、作曲、声楽、ピアノ演奏などもあります。文学部は口頭試問、人間生活学部は卒業論文発表会や卒業制作展などで研究成果を発表します。

今号では、論文以外の卒論発表会や卒業制作展の様子をお伝えし、卒業研究をするとはどういうことかを紹介します。



卒業制作をするということ | 児童学科 美術研究室

「知識、技術は身に付いた道具だと思う。この道具を使うのは心。心を育てる。しんどいこと、めんどうくさいこと、がまんすることを育てることだと思います。そうでないと、これから社会を生き抜いていけないと思います。」児童学科美術研究室の片山裕之教授は話します。

美術研究室絵画コースは4年生の秋に大学内で中間発表を、2月に岡山市内で卒業制作展を開催します。授業や教育実習、就職活動、教員採用試験の準備等と並行して描き上げた一人7点の習作は見応えがあります。限られた作業時間であるため、すべての作品に納得しているわけではないそうですが、時系列に並ぶ作品には個々の成長が現れています。

「絵を描きたいと思って児童学科に入学した。絵画の授業は、自分でこう描きたいと思うのと違ったので、少ししんどくなった時もあった。でも今になるとそれが大切なことがわかる」「卒業制作でやりきれなかったこと。その宿題をするのがこれから的人生」と、学生は4年間を振り返っています。

卒業制作は4年間の集大成であると同時に、これから的人生の出発点でもあるようです。



仲間とともに成長 | 日本語日本文学科 書道卒業制作展

日本語日本文学科では大学で培った書の実技・理論を昇華させる最終ステージとして4年次の末に「書道卒業制作展」を開催します。漢字、仮名、漢字仮名交じりの書、一字書、少字数の書、篆刻・刻字などの分野から、臨書・創作など一人5点の作品を制作します。書道というと一人でひたすら書を書く姿を想像しますが、裏打ちやパネル作りなどはすべて手作りであるため、みんなで協力して作業を進めます。

制作展に携わった学生は「全員が、なにかしらの役割を持っていて、それが卒業制作展に繋がりました。挙げればきりがないくらい多くの方が関わることで、卒業制作展が開催されます。そんな当たり前のことを仲間の存在が教えてくれました。そして、卒業制作展を開催できたことは私の自信にも繋がりました。」と感想を寄せてくださいました。



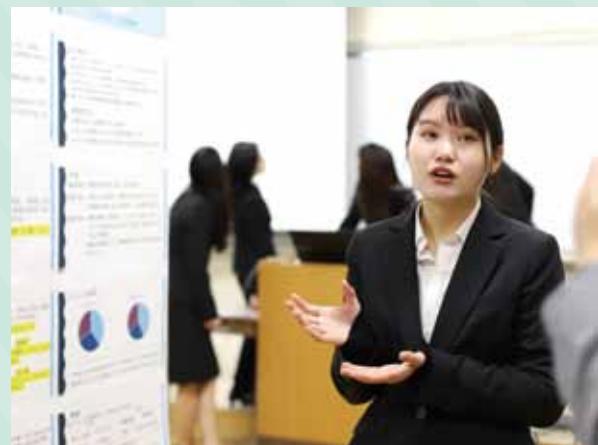
子どもの成長について研究するということ | 児童学科

教育学、心理学、文化学研究室は、ゼミごとに教室に分かれ、同級生や下級生の前でスライドやパネルを用いて発表します。研究室によって異なりますが、概ね10分程度の発表のち質疑応答があります。

特別支援教育・児童福祉学研究室はパネル発表でした。研究内容を身振り手振りを加えながら堂々と発表する学生はみんな自信にあふれキラキラと輝いていました。後輩たちから発せられる様々な質問に躊躇することなく答えている姿に、研究過程で手を抜かず、とことん研究に取り組んだ成果が表っていました。



子どもの成長について研究する過程で、指導教員や子どもだけでなく、保護者や学校園の先生方と対話することもあります。子どもの成長について研究する中で、自分自身が成長し、その成長を確認していくのが卒業研究であるようです。



音楽研究室



卒業研究を発表するということ | 食品栄養学科

食品栄養学科では、中間発表会(4月)と卒業論文発表会(11月)、計2回の卒業論文研究の発表会を開催します。どちらの発表会も4年生が自らの研究成果をポスターにまとめて、他ゼミの4年生や2、3年生にわかりやすく伝えられるように努力を重ねています。特に中間発表会は、4年生には就職活動で卒論を説明できるようになるための練習機会の一つであり、3年生には直接先輩の発表を聴き、質問できる貴重な場です。これはその後のゼミ選びの参考にもなります。

発表を通じて、人に伝えることの難しさを知り、特に実社会で必要となるプレゼン能力やコミュニケーションスキルについて学生の成長が見られました。



卒業研究を通して人間として成長する

卒業論文を書くということは、自らが発見した課題にふさわしい研究手法を学ぶことです。また同時に、研究対象である人や自然や物、そして、指導教員やゼミの仲間たちとの対話を重ねることにより、自分と向き合いつづける作業もあります。卒業研究に取り組むということは、一人ひとりの学生が自らの多様な可能性を発見していく成長プロセスであるようです。

11月

— November —

Event

教皇フランシスコ訪日「平和のための集い」ボランティアとして参加

ローマ教皇の来日は、1981年の第264代教皇ヨハネ・パウロ二世以来、2度目で38年ぶりとなります。2019年11月23日(土)～26日(火)に東京・広島・長崎を訪問されました。そのうち、広島平和公園で行われた「平和のための集い」に本学からも学生、教職員40名が、ボランティアスタッフとして参加しました。

2019年11月24日夕方、当日は朝からバスで広島に向かい、昼過ぎから活動が始まりました。スタッフブルゾンに身を包んだスタッフが数チームに分かれ、広島国際会議場内で、諸宗教代表者の方や被爆者代表・平和大使などの控え室への案内や、登壇される方のステージへの案内をしました。最初は緊張しましたが、笑顔であいさつすることを心がけ、最後まで責任を持って活動することができました。

集いが始まると、ボランティアスタッフの待機場所で見学しました。被爆者の証言や、「戦争のために原子力を使用することは犯罪以外の何ものでもない」という教皇フランシスコのお言葉に、戦争がもたらした悲惨さや平和の大切さを学びました。

ボランティアスタッフとしての貴重な経験や教皇フランシスコにお目にかかることができたという実感を通して、戦争を経験していない私たちも平和な世界を願う気持ちを持つことができました。

(キリスト教文化研究所)



詳細はブログを
ご覧ください

11月

— November —

Event

社会連携活動の活性化

本学では岡山市主催の「2019年度学生イノベーションチャレンジ推進プロジェクト事業」に採択された取り組みや、学科活動で地域と連携した活動を活発に行ってています。2019年11月～2020年5月の活動を紹介します。

11月2日(土)～4日(月)に岡山市の石山公園にて開催された「石山公園ストライプ・マルシェ」(主催ストライプ・インターナショナル)や、11月2日(土)に岡山市の下石井公園で開催された「地産地消マルシェ2019 秋の収穫を祝う 年に一度のおまつり」に本学学生が企業とコラボしてオリジナルパン等を作り、販売をしました。

「2019年度学生イノベーションチャレンジ推進プロジェクト事業」では、「若者視点の岡山市観光地化」チームが岡山市の魅力を発信するプロモーション活動に取り組んだり、「清心・出石町活性化

チーム」が、出石町の企業に協力をいただき、“女性限定のうつわづくりワークショップ”を開催したりしました。同事業には、他にも3チームが採択され、それぞれ地域課題の解決に向けて活動しました。

2020年5月には、人間生活学科の学生が岡山市の焼きたてパン工房 Lassenと協力してコラボパンを制作し、販売をはじめました。新製品開発やプロモーションを協働で行い、マーケティングの実践的な勉強をしながら地元の産業発展にもつなげようという試みを行っています。



本学の社会連携について
詳しくはブログをご覧ください

12月

—
December

Event

ノートルダムホール本館・東棟 DOCOMOMO Japan選定プレート贈呈式

2019年12月22日(日)、本学にて「ノートルダムホール本館・東棟 DOCOMOMO Japan 選定プレート贈呈式」が行われました。

2018年7月、ノートルダムホール本館と東棟がDOCOMOMO Japanによる「2017年度 日本におけるモダン・ムーブメントの建築216選」に保存の重要性の高い近代建築として選定され、2019年12月22日(日)に、選定プレートが贈呈されました。現在、このプレートは大学正門のノートルダムホール本館入口横に建てられた石板に埋め込まれています。

DOCOMOMO Japanとは、ポルトガルのリスボンを本部とし、20世紀のモダン・ムーブメント(近代運動)に関する近代建築とその環境の記録・保存・評価・調査を行う国際的学術組織DOCOMOMO(略称:ドコモモ)の日本支部です。



4月

—
April

Event

インクルーシブ教育研究センターの設置

2016年7月に開設した特別支援教育研究センターは、特別支援教育の推進に寄与することを目的に、学生の学びのサポートと地域への貢献に取り組んで参りました。2020年4月1日からは、特別支援教育研究センターの発展的解消により、新たにインクルーシブ教育研究センターを設置しました。本センターは、キリスト教精神における包摂性と誰一人取り残さないとするSDGsの考え方を基盤とし、共生社会の実現に寄与することを目的としています。

共生社会の実現に向けてという大きな目標を、すぐに実現することは難しいことです。しかし、その方向に向けて、「キリスト教精神における包摂性を基盤とした本学からのインクルーシブ教育の発信」「インクルーシブな発想に支えられた教育に挑戦していくとする教員の育成」「教職に限らず、インクルーシブな発想を持って社会で生きようとする人の育成」を進めて参ります。

そのためのキーワードは『融合』です。特別な支援を必要とし、児童生徒に対する特別支援教育の知見だけではなく、教育学の他領域との『融合』により、徹底的な個への関心と緩やかな協同性によるインクルーシブ教育のかたちを追究していきます。

また、教育領域だけではなく、キリスト教学、哲学、

心理学、家政学、生化学等を専門分野とする教員を本センター員として迎え、多領域との『融合』により、全ての人を大切にしていくこうとするインクルーシブのかたちを追究していきます。

教職に関する研究のみならず、キリスト教精神を基盤とした全ての人にかかるインクルーシブのかたちを、丁寧に紡ぎ出して発信していきます。できるだけ多くの方と共有できるような発信の工夫を検討しながら、緩やかな協同性の実現に向けて進んでいきたいと思います。

(インクルーシブ教育研究センター長 青山 新吾)

詳細はブログを
ご覧ください



INTERNATIONAL EXCHANGE

国際交流

- Seishin and the World -

留学 STUDY ABROAD EXPERIENCE 体験記



英語を勉強する理由

自然豊かなビクトリアで過ごした日々は、初めてのことでのびのびと過ごしていました。親元を離れ生活したこと、多国籍の友人と心通わせ笑い合ったこと、クラスメイトたちから刺激を受け必死に英語力向上に努めたこと、これらは私の人生においてかけがえのない宝物です。

特に喜怒哀楽と共にしたクラスメイトたちとの思い出は尽きず、3か月はあっという間に過ぎていきました。「さよならじゃないよ、またどこかでね」と言って手を振り別れたときは寂しくもあり、彼らとビクトリアで共に過ごせたことを幸せに思いました。一緒に過ごした3か月以上の月日が経っても、彼らとは連絡をとっており、心は繋がっています。今では世界中の友人に会いに行くことが私の夢であり、英語を勉強する原動力にもなっています。

文学部英語英文学科 4年
鹿本 真尋



ビクトリアマラソンのボランティア(写真左)

2019年9月から12月(約3か月)に1名、同年9月から2020年3月(約6か月)に5名の学生がカナダのビクトリア大学に留学し、帰国しました。3月に帰国した5名については新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受けて予定より2週間早い帰国となりました。12月に帰国した1名と3月に帰国した1名がそれぞれの思いを綴りました。



ビクトリアで得た私の宝物

私は、ビクトリア大学へ7か月間の語学留学をしました。留学の目的は英語力の向上でしたが、実際に学んだことは英語だけではありませんでした。貧困に苦しむ人々のため募金活動を行った際には、さまざまな国から集まった留学生やビクトリア大学の学生たちから協力を得、世界規模の問題にも“地球市民”として一致団結して取り組むことが大切であるということを学びました。また積極的に交友関係を広げ、多様な価値観を持つ友人たちと出会い彼らの心の温かさに触れる中で、友情に国籍は関係ないということを改めて強く感じました。

このような経験ができたビクトリアは、私にとって第二の故郷といえる場所です。苦楽の日々を共にした友人たちやホストファミリーは家族のように大切な存在であり、彼らとの数え切れないほどの思い出は、生涯忘ることのできないでしょう。留学を通して成長した自分自身に誇りを持つつ、両親をはじめ留学を支えてくださった方々に恩返しできるようこれからも精進します。

文学部現代社会学科 4年
秋山 桃子



ナイアガラの滝にて(写真右)

学外活動



**村中李衣 教授
第35回坪田譲治文学賞を受賞
作品『あららのはたけ』**

大人も子どもも共有できる世界を描いた優れた作品を対象とした岡山市の文学賞「第35回坪田譲治文学賞」に、本学人間生活学部児童学科の村中李衣教授の作品『あららのはたけ』(偕成社)が選ばれました。

2020年3月18日(水)に岡山市役所において贈呈式が行われました。



課外活動

**「第5回デモクラシー・ナウ！
学生字幕翻訳コンテスト」
最優秀賞受賞**

英語英文学科の前田優奈さんと丸川未来さんが最優秀賞を受賞し、2020年1月26日(日)に行われた受賞イベントに出席しました。(東京大学本郷キャンパス)

授業課題の一環として同コンテストにエントリー(課題4:「国境壁と移民」)し、「人に伝わる翻訳」をするために歴史的背景などを調査して言葉を選ぶ作業を繰返しました。

今回はお二人に表紙を飾っていただきました。



詳細はブログをご覧ください

課外活動



**第19回カトリック女子大学総合スポーツ競技大会
総合優勝**

2019年12月14日(土)・15日(日)に京都ノートルダム女子大学にて開催されました。この大会は、同じ教育理念を根底に置くカトリック女子大学が、スポーツを通して大学相互間の交流の場を広げ、連携を深めることを願って毎年開催されているものです。当日は好天にも恵まれ、競技に、応援に大変盛り上がった2日間となりました。総合成績も、総合優勝と大活躍でした。



詳細はブログをご覧ください

総合成績(総合得点同点により同位あり)

- | 総合優勝 ノートルダム清心女子大学
- | 総合優勝 聖心女子大学
- | 第3位 京都ノートルダム女子大学
- | 第3位 白百合女子大学
- | 第5位 清泉女子大学

新役職者の紹介(2020年度任命)

2020年4月1日付



人間発達学専攻主任
中内 みさ
人間生活学部教授



人間生活学専攻主任
豊田 尚吾
人間生活学部教授



英語英文学科長
木津 弥佳
文学部教授



人間生活学科長
清水 純一
人間生活学部教授



食品栄養学科長
長瀬 統彦
人間生活学部教授

新任者の紹介



現代社会学科
森 泰三
文学部 教授



日本語日本文学科
近藤 友子
文学部 准教授



英語英文学科
山口 麻衣子
文学部 講師



日本語日本文学科
家入 博徳
文学部 講師



現代社会学科
久野 洋
文学部 講師



現代社会学科
福田 雄
文学部 講師



英語教育センター
高橋 昌子
英語教育センター 助教



人間生活学科
中井 俊雄
人間生活学部 准教授



人間生活学科
成清 仁士
人間生活学部 准教授



児童学科
土居 裕士
人間生活学部 准教授



食品栄養学科
加藤 奈々
人間生活学部 助手

2020年度 新任の教職員

2020年4月1日付

教員

文学部 教授	現代社会学科	森 泰三
文学部 准教授	日本語日本文学科	近藤 友子
文学部 講師	英語英文学科	山口 麻衣子
文学部 講師	日本語日本文学科	家入 博徳
文学部 講師	現代社会学科	久野 洋
文学部 講師	現代社会学科	福田 雄
英語教育センター 助教	英語教育センター	高橋 昌子
人間生活学部 准教授	人間生活学科	中井 俊雄
人間生活学部 准教授	人間生活学科	成清 仁士
人間生活学部 准教授	児童学科	土居 裕士
人間生活学部 助手	食品栄養学科	加藤 奈々

職員

入試広報部 参与	竹内 伸
----------	------

2020年度 退職の教職員

職員

施設企画管理部	神原 和也	2020年4月12日付
情報センター	加藤 周一	2020年4月30日付
IRセンター	米澤 健二	2020年8月31日付

2019年度 退職の教職員

教員

文学部 特任教授	日本語日本文学科	佐野 榮輝
文学部 准教授	日本語日本文学科	川崎 千加
文学部 准教授	日本語日本文学科	原 豊二
文学部 教授	現代社会学科	河合 保生
文学部 教授	現代社会学科	小嶋 博巳
人間生活学部 教授	人間生活学科	小川 賢一
人間生活学部 特任教授	人間生活学科	上田 恭嗣
人間生活学部 特任教授	人間生活学科	平松 正臣
人間生活学部 教授	児童学科	熊澤住子
人間生活学部 客員教授	食品栄養学科	北畠直文
英語教育センター 准教授		中川康雄

職員

学務部 次長(諸課程)	安藤 由紀子
入試広報部 参与	原 彪
施設企画管理部(管財)	西 和孝
施設企画管理部(管財)	高橋 栄
施設企画管理部(管財)	片山 節夫
施設企画管理部(警備)	高谷 晴彦

卒業生の活躍

消防署による立入検査

本学卒業生が担当職員の一人として検査

2月20日(木)に、大学にて消防署による立入検査が実施されました。立入検査は、建物の防火管理が適正に行われているか定期的に検査するものです。大学と同じ敷地内にある附属小学校、附属幼稚園を含む、広いキャンパス内を岡山市西消防署担当者が分担しながら検査を行いました。

この消防検査は、本学英語英文学科(66期2018年3月卒)卒業生の岸奈津美さんが担当職員の一人として来学しており、学生広報スタッフ「SPARKLE」が火災報知器確認業務の様子を見学しました。地域で活躍する本学卒業生の仕事の様子を目にする貴重な機会となりました。



卒業生の活躍

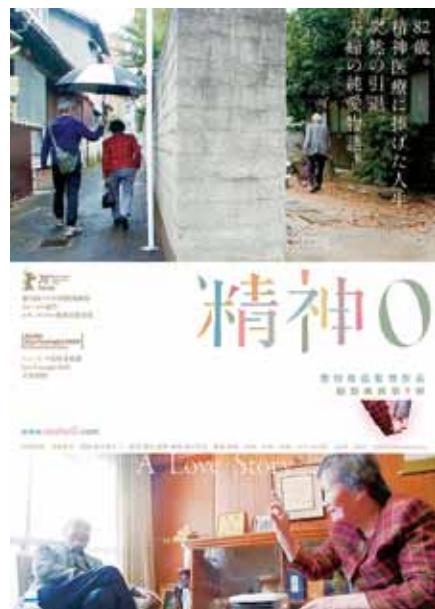
本学卒業生 柏木規与子さん

プロデューサーをつとめた映画「精神0」が
「第70回ベルリン国際映画祭」フォーラム
部門にてエキュメニカル審査員賞を受賞

2月29日(日本時間3月1日)、ドイツ・ベルリンで開催された「第70回ベルリン国際映画祭」フォーラム部門にて、想田和弘監督の映画「精神0」が、エキュメニカル審査員賞を受賞しました。想田さんの妻、柏木規与子さんは本学家政学部(現 人間生活学部)児童学科(37期 1989年3月卒)の卒業生で、当作品ではプロデューサーをつとめられました。

エキュメニカル審査員賞は、キリスト教関連団体の選考委員たちが選ぶ、精神性の高い作品に贈られる賞です。

映画「精神0」は柏木さん製作、想田さん監督の第10作目の観察映画で、「精神(2009年日本公開・ベルリン映画祭プレミア)」の続編として製作されました。柏木さんは1993年の渡米以来ニューヨーク在住ですが、本作は地元である岡山市が舞台となっています。



訃報

ご逝去されました故人の永遠の安らぎをお祈りいたします。

キリスト教文化研究所 須沢 かおり 教授 (2019年12月28日)

編集後記

3月に本学を卒立っていかれた皆様ご卒業おめでとうございます。新入生の皆様ご入学おめでとうございます。新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、式典、行事、イベントの中止あるいは延期を余儀なくされることになりました。遠隔授業の実施など多くの困難に直面しながらも、6月には規制が緩和され、新4年生にキャップとガウンの授与、そして、7月には新入生のための入学感謝の集いを行なうことができました。

コロナ禍という大変な中においても、皆様の協力を得ながら学報の制作をすすめることができ、204号を発行することができました。ご協力くださいました卒業生、在学生、教職員の皆様に感謝いたします。

(広報室)

聖書の言葉

「神は、あらゆる苦難に際してわたしたちを慰めてくださる」パウロの言葉は、今日を生きる私たちにも力強く響きます。それは、この世界が『あらゆる慰め』を必要としているからでしょう。

本年、世界規模で発生している新型コロナウイルスは、私たちの生活を変させています。

多くの人々が対面することも叶わぬまま、大切な家族や友人を天国へと見送りました。また、職を失い生活が脅かされている方々もおられます。このような悲しみや苦しみが世界を覆う一方で心からの支援も広がり、私たちを温かいながらで結んでいます。

この聖書箇所で「慰め」と訳されている「バラクレイゼ」という言葉は、警告・勧め・慰め・励まし・嘆願といった多角的な語義を持っています。この幅広さは「とらわれることのない形で神さまの救いの出来事を証言する」ためであると解釈されています。そして私たちはいつもこの証言者となるよう、呼びかけられ、促されているのでしょうか。

苦難の中に置かれた私たち一人ひとりの心が慰められ、他者の苦しみとともに歩む者となつていけますように。

わたしたちの主イエス・キリストの父である神憐れみ深い父、あらゆる慰めの源である神はたたえられますように。神は、わたしたちがどのような苦難にある時でも慰めてくださいます。そこでわたしたちも、自分たちが神から慰めていただくその慰めによつて、あらゆる苦難の中にある人を慰めることができます。

コリントの信徒への手紙 II 1章3・4節
フランス社会聖書研究所訳注『聖書』(サンクロ、2013年)

キリスト教文化研究所学外所員シスター橋本晶子

Mini Serialization

Seishin Archives

今に続く清心の歴史をご紹介

卒業論文要旨集第1号



本学の教育課程では卒業研究を大切にしています。写真は1974年(昭和49年)1月に発刊された人間生活学科(当時は家政学科)の卒業論文要旨集です。

2019年度現在までに、日本語日本文学科は18号、現代社会学科は14号、人間生活学科は48号、児童学科は52号、食品栄養学科は26号が発行されています。これら要旨集には、約16,200名の汗と涙の成果が詰まっています。

ノートルダムの風景 100ND

1929年に建てられたノートルダムホール本館1階の100NDは、高い天井と大きな窓が特徴です。構造的には柱がしっかり造られており、1メートル以上の幅を持っているため地震に強く、天井はコンパスで描かれた円弧でデザインされています。

かつては入学式・キャップ・アンド・ガウン授与式・卒業証書・学位記授与式などが行われる講堂として使用されていましたが、学生数が多くなるにつれ100NDは教室として使われるようになりました。さらに2017年度からは、学生の憩いの場であるラウンジとして使用されています。



Cover : 文学部 英語英文学科 4年 前田 優奈(上)

文学部 英語英文学科 4年 丸川 未来(下)

「第5回デモクラシー・ナウ!学生字幕翻訳コンテスト2019」最優秀賞受賞(受賞当時は3年生)。英語英文学科国際コミュニケーション履修コース演習科目の課題の一環として、同コンテストにエントリーした。(P.12に詳細)



ノートルダム清心女子大学 BULLETIN Vol.204

発行 ノートルダム清心女子大学 広報室

2020年8月31日

〒700-8516 岡山市北区伊福町2-16-9
TEL(086)252-3107 <https://www.ndsu.ac.jp/>